

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 14 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520314

研究課題名（和文） フランス文学と映画の相関関係についての総合的研究

研究課題名（英文） Comprehensive Research on the Interrelationship between French Literature and Films

研究代表者

野崎 歓 (NOZAKI KAN)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：60218310

研究成果の概要（和文）：

フランスにおける事例を出発点としつつ、各国文学の研究者たちと活発に意見を交換することで、文学と映画の相互関係を多様な視点からグローバルに捉えることができた。その成果を『文学と映画のあいだ』と題する共同論集にまとめ、平成 24 年度に東京大学出版会より刊行する予定である。文学と映画がいわば両輪をなして物語芸術の新たな地平を切り開いてきた様相を明らかにする、ユニークな意義をもつ論集となるはずである。論文執筆、翻訳刊行、そして実作者との交流においても豊かな成果を上げることができた。

研究成果の概要（英文）：

Using case studies in France as a starting point, I held a series of lively discussions with researchers in the field of literature from a range of countries, which enabled me to gain a global understanding of the interrelationship between French literature and films from diverse perspectives. The results of these discussions were collected in the joint study entitled “Between Literature and Movies”, which is set to be published during FY 2012 by Tokyo University Press. This unique collection of papers should help demonstrate how a so-called close interconnected relationship between literature and films has served to open up new horizons in narrative art. My work in this area has also allowed me to obtain rich results in respect to writing papers, publishing translations, and networking with writers and film makers.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：(1) フランス文学 (2) フランス映画 (3) 映画論 (4) シュルレアリスム (5) ヌーヴォーロマン (6) 現代小説 (7) 映画史 (8) 文芸映画

## 1. 研究開始当初の背景

文学と映画が相互に及ぼしてきた影響関係の実態を明らかにするような研究は、これまでさほど行われてこなかった。映画発祥の地であるフランスは、1900年代に「フィルム・ダール（芸術映画）」運動が起こったことが示すとおり、映画と他の芸術領域、とりわけ文学・演劇との結合に熱心な国である。ところがそれらの相関をめぐる本格的な研究はあまり存在しなかった。現代的な映画理論の先駆者アンドレ・バザンによる『映画とは何か』には、小説の映画化を分析した画期的論文「不純な映画のために」が含まれる。しかしその後、バザンの問題提起を正面から受け止める成果はあまり見られない。

他方、日本におけるフランス文学研究においても、映画を視野に入れて、文学とのあいだの相互作用が論じられることはきわめて稀だった。その空隙を埋める研究を企図したゆえんである。

## 2. 研究の目的

本研究は、文学と映画のあいだに作用し続けてきた強力な相関関係のダイナミズムを照射することにより、日仏の文学・映画研究における大きな欠落を補うことを目的とする。具体的には、19、20世紀フランス文学がフランスの映画作家たちにとってどのように創造の糧となり、いかなる映画表現を生み出していったかを跡づけると同時に、20世紀フランス文学に映画がいかなる刺激を与え、従来の小説のエクリチュールを刷新する可能性を開いたかを検討する。すなわち、一方では映画史上の大監督たちにおける文学体験の意味を考え、文学作品の読解を出発点とする映画製作のあり方を明らかにするとともに、他方では、作家が映画監督となる事例をその象徴的ケースとして、20世紀の文学者にとって映画が及ぼし続けた魅惑と影響のありかを具体的に浮き彫りにしていく。

研究代表者はこれまで、ジェラルド・ド・ネルヴァルを中心とする19世紀フランス・ロマン主義文学を主たる研究対象としてきた。しかし同時に映画にも強い関心を抱き、フランス映画史上に屹立するシネアストというべきジャン・ルノワールの世界に魅せられて著書『ジャン・ルノワール 越境する映画』（2002）を刊行した。この著作はサントリー学芸賞を受けられるなど好評を博したが、ルノワールがナチス侵略を逃れてハリウッドに亡命したのちを主に扱ったものであり、彼がフランスで、ゾラやモーパッサンら、自然主義作家を次々に映画化することをとおして自らのスタイルを確立した1930年代の仕事についてはほとんど論じておらず、その側面からさらに考察を深める必要を痛感

していた。本研究はそうした内的必然性にも支えられている。

## 3. 研究の方法

本研究は、フランス文学と映画を結ぶダイナミックな相互関係を、その双方向性に注目して総合的にとらえようとするものである。方法としては具体的に以下の5点を考え、それに従って研究を推進する。

まず必要なのは、①文学作品の映画化に關するできるかぎり網羅的なフィルモグラフィの作成である。研究遂行のために欠かせない基礎作業として、19、20世紀フランス文学の作品を原作とするフランス映画を、映画史の流れに即してリストアップしコーパスを作成する。そのうえでビデオ、DVDを可能な限り幅広く入手するとともに、それらの作品に関する文献資料の収集にも力を注ぐ。

それと並行して、②各研究担当者が自らの専門および関心に即して、個々の事例に関する分析、考察を進めていく。ジャン・ルノワール、ロベール・ブレッソンといった最重要と目される監督における文学から映画創造へのメカニズムを探るかたわら、ル・クレジオやジャン＝フィリップ・トゥーサンら現代作家における映画体験の重要性を分析。③それらの研究を論文にまとめ、またシンポジウムや講演会を開催、成果を発信することに努める。④さらに、このテーマに関してフランスを中心に各国の研究者との意見交換を密に行い、映画研究と文学研究をクロスさせて展開させるための国際的なネットワークの構築をめざす。⑤同時に、日本国内のフランス文学関係以外の外国文学者、国文学者との交流も重ねることで、多様かつ広角的な視点に立って「文学と映画」をとらえる可能性を探っていく。

## 4. 研究成果

フランス文学と映画の相互関係を、そのダイナミックな双方向性に注目して総合的にとらえようとする本研究にとって、さまざまな分野の専門家たちの協力を仰いで共同研究、およびシンポジウムの実現は大きな目標の一つだった。東日本大地震により、海外の研究者を招聘し交流、意見交換を行う計画を断念せざるを得ない事態となったのはまことに残念であった。しかしその分、国内の文学・映画研究者との交流は当初考えていた以上に緊密に重ねることができ、フランス文学と映画のみではなく、より広く「文学と映画」をめぐる、とりわけ近代小説と映画が相互に及ぼしあった刺激の大きさを多様な視点から捉えることができた。『文学と映画のあいだ』と題する共同論集に成果をまとめ、平成24年度に刊行の予定である。本研究に参加し

たメンバーに加え、アメリカ、イギリス、ドイツ、中国、ロシアなど各国の文学・文化の日本人専門家たちがさまざまな事例にもとづきつつ、文学と映画が切り開いてきた物語芸術の新たな地平を明らかにする、意義ある論集となるはずである。また研究代表者および研究分担者は各自、担当分野に関する研究を深め、具体的な成果を上げることができた。アンドレ・バザンの『映画とは何か』翻訳の完成（平成 25 年刊行予定）、ル・クレジオの映画論集翻訳の完成（平成 24 年初夏刊行予定）、映画的技法の小説における重要な一例であるボリス・ヴィアンの『うたかたの日々』翻訳の出版（平成 23 年）、アメリカで出版されるフランソワ・トリュフォー論集への寄稿（平成 24 年秋刊行予定）などはその一部である。フランスの作家たちへの取材調査に関しても、ル・クレジオを招聘して講演会を開催し（平成 21 年 11 月 29 日）、作家本人の口から日本映画、とりわけ溝口健二の作品が彼にとっていかに決定的な「発見」であったかを詳しく聞くことができた。また平成 24 年 3 月のフランス出張時には、ルーヴル美術館で映画作品を含むビジュアル・アート作品の展示を開催中のジャン＝フィリップ・トゥーサンと会見、現代作家にとって映像表現がもつ創造的意義をくわしく聞くことができた。本研究で得た事柄をもとに今後もより思考を深め、新たな視点を構築していきたいと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 31 件）

1. 野崎 勲、「フランス文学と愛 第 1 章 太陽王と恋の世紀」、『群像』、査読無、67 巻 2 号、2012、p. 200-216.
2. Kan Nozaki、「De l'idolâtrie au dialogue : les écrivains japonais et la littérature française」、*La Nouvelle Revue Française*、査読無、599-600 号、2012、p.130-145.
3. アンヌ・ヴィアゼムスキー、ジャン＝クロード・ボネ、堀江敏幸、野崎 勲、「シネマトグラフからエクリチュールへ—小説家アンヌ・ヴィアゼムスキー」、『文學界』、査読無、65 巻 5 号、2011、p. 218-231.
4. Kan Nozaki、「Japanese Readings: The Textual Thread」、*Opening Bazin: Postwar Film Theory & It's Afterlif*、査読無、2011、p. 324-329.
5. 野崎 勲、「映画愛と友情の一季節」、『キネマ旬報』、査読無、通巻 2403 号、2011、p. 24-27.
6. 野崎 勲、「魔法のような文芸映画」、『エキブ・ド・シネマ』、査読無、185 号、p. 8-9.
7. Kan Nozaki、「Retraduire Stendhal aujourd'hui : *Le Rouge et le noir* dans le contexte japonais」、*Réception et créativité : le cas de Stendhal dans la littérature japonaise moderne et contemporaine*、査読無、2011、p. 65-74.
8. Yoshikazu Nakaji、「Réécriture et transformation de soi : Rimbaud face au code biblico-chrétien」、*Comment naît une œuvre littéraire ? Brouillons, contextes culturels, évolutions thématiques*、査読無、2011、p.191-202.
9. Yoshikazu Nakaji、「La poétique de Baudelaire à la lumière des Paradis artificiels」、*L'Année Baudelaire*、査読有、13/14、2011、p.137-156.
10. 塚本昌則、「内なる対話——ヴァレリーからベケットへ」、『仏語仏文学研究』、査読有、42 号、2011、p.155-169.
11. 塚本昌則、「散文芸術としての『シルトの岸辺』」、『別冊水声通信 ジュリアン・グラック』、査読無、2011、p.116-136.
12. Marianne Simon-Oikawa、「From Translation to Supranational Poetry: the Polyglot Poems of Pierre Garnier and Niikuni Seichi」、*Translation & Multilingual Literature, Traduction & Littérature Multilingue*、査読無、2011、p.117-138.
13. Marianne Simon-Oikawa、「Notorious *moji-e* : Japanese Graffiti in the Edo Period」、*Ukiyo-e Caricatures*、査読無、2011、p.71-86.
14. 野崎 勲、「21 世紀のフランス文学——資本・越境・記憶」、『神戸大学大学院国際文化科学研究科異文化研究交流センター 2010 年度報告書』、査読無、2011、p.76-89.
15. Masanori Tsukamoto、「« La bêtise n'est pas mon fort »—— la notion de bêtise chez Valéry et chez Faubert」、『立教大学フランス文学』、査読無、40 号、2011、p.67-79.
16. 塚本昌則、「言葉と写真——ロラン・バルトの『明るい部屋』を中心に」、『文化交流研究』、査読無、24 号、2011、p.91-104.
17. Masanori Tsukamoto、「Littérature et langage indirect chez Valéry」、*Fabula : la recherche en littérature*、査読無、2011、<http://www.fabula.org/colloques/document1418.php>.
18. 中地義和、「フィクションという探求——ル・クレジオとの対話」、『すばる』、査読無、2010、p.76-89.
19. マリアンヌ・シモン＝及川、「『日本の文字文化を探る』の出版にあたって」、『勉強通信』、査読有、18 号、2010、p.13-15.

20. 野崎 敏、「海外文学最前線・フランス語圏 新しい小説は、現実に関わりかける」、『群像』、査読無、第 64 巻第 5 号、2009、p.331-340.
21. 野崎 敏、「台湾映画の「フランス映画化」をめぐる」、『台湾学会ニュースレター』、査読無、第 16 号、2009、p.6-8.
22. 野崎 敏、「これが越境だ イー・トンシン監督『新宿インシデント』、『すばる』、査読無、第 31 巻第 5 号、2009、p.308-309.
23. 野崎 敏、「キリストはナマズを釣り上げるのか エルマンノ・オルミ監督『ポー川のひかり』、『すばる』、査読無、第 31 巻第 8 号、2009、p.302-303.
24. 野崎 敏、「アニメにとって現実とは何か アリ・フォルマン監督『戦場でワルツを』、『すばる』、査読無、第 31 巻第 11 号、2009、p.400-401.
25. 野崎 敏、「勝手に逃げろ ペ・ドゥナと女優業の不思議な関係」、『ユリイカ』、査読無、第 41 巻第 10 号、2009、p.37-44.
26. 野崎 敏、「フィリップ・クローデル監督インタビュー」、『すばる』、査読無、第 32 巻第 4 号、2009、p.282-285.
27. 野崎 敏、「暴力の無限級数 ヤン・イクチュン監督『息もできない』、『すばる』、査読無、第 32 巻第 4 号、2009、p.308-309.
28. Yoshikazu NAKAJI, « Les « voix instructives » dans les poèmes de 1872 », *Europe*, 査読有、87 année, no. 966, 2009、p.130-138.
29. 塚本昌則、「二十世紀フランス文学と死——類型化の試み」、『死生学研究』、査読無、第 11 号、2009、p.111-146.
30. 塚本昌則、「「無意識」と「錯綜体」——フランス作家たちの「抵抗」」、『フロイト全集月報』、査読有、第 13 号、2009.
31. Marianne Simon-Oikawa, « Les arbres aux feuilles d'or », *Le Frisson esthétique*, 査読有、n° 8, 2009、p.52-55.

[学会発表] (計 12 件)

1. Yoshikazu Nakaji, « Le poète en prose est-il moderne ou antimoderne ? », コレージュ・ド・フランス (パリ)、アントワヌ・コンパニオン教授のボードレル・セミナーでの招待講演、2012 年 3 月 27 日、Collège de France (フランス共和国・パリ)
2. Marianne Simon-Oikawa, « Les poèmes à voir de Pierre Albert-Birot », パリ第 3 大学での招待講演、2012 年 2 月 23 日、パリ第 3 大学 (フランス共和国・パリ)
3. 塚本昌則、「ヴァレリーとフロイト——声・仮面・文化への不満」、東京大学文学部フランス文学研究室主催 (研究代表

者：塚本昌則) による研究集会「フロイトの時代——文学・人文科学・無意識」での発表、2011 年 11 月 5 日、東京大学 (東京都)

4. 野崎 敏、「アンドレ・ブルトンと子ども」、日本フランス語フランス文学会 2010 年度春季大会ワークショップ「シュルレアリスムの何が未知のままか」、2010 年 5 月 29 日、早稲田大学 (東京都)
5. Tsukamoto Masanori, « Degrés du dessin : une autre poétique de Paul Valéry », 国際シンポジウム「絵を語る——19-21 世紀のフランスにおける文学を中心に」、2010 年 11 月 27 日、東京大学 (東京都)
6. Marianne Simon-Oikawa, « De la traduction à la poésie supranationale : les poèmes polyglottes de Pierre Garnier et Niikuni Seichi », 国際比較文学学会、2010 年 8 月 16 日、中央大学校 (大韓民国・ソウル)
7. Marianne Simon-Oikawa, « La poésie visuelle en France et au Japon : échanges et créations », 延世大学校講演会、2010 年 8 月 21 日、延世大学校 (大韓民国・ソウル)
8. マリアンヌ・シモン＝及川、「画家の背中を見て——ベルナル・ノエルの『Roman d'un regard』を中心に」、国際シンポジウム「絵を語る——19-21 世紀のフランスにおける文学を中心に」、2010 年 11 月 27 日、東京大学 (東京都)
9. Kan Nozaki, « Retraduire Stendhal aujourd'hui : *Le Rouge et le Noir* dans le contexte japonais », 国際高等研究所研究プロジェクト「受容から創造へ」、2009 年 5 月 29 日、国際高等研究所 (京都府)
10. Yoshikazu NAKAJI, « L'avenir de la culture française au Japon », 日本フランス語フランス文学会でのワークショップ、2009 年 5 月 24 日、中央大学 (東京都)
11. Yoshikazu NAKAJI, « Les lignes de force de "Nuit de l'enfer" », Rimbaud. Des Poésies à la Saison, 2009 年 12 月 12 日、パリ第 4 大学 (フランス共和国・パリ)
12. 塚本昌則、「クレオール幼年時代——パトリック・シャモワズ『最期の身ぶり——カリブ海偽典』をめぐる」、日本フランス語フランス文学会 2009 年度秋季大会、ワークショップ「クレオール再考」、2009 年 11 月 8 日、熊本大学 (熊本県)

[図書] (計 11 件)

1. 塚本昌則、中央公論新社、『フランス文学講義——言葉とイメージをめぐる 12 章』、2012、240p.
2. ボリス・ヴィアン (野崎 敏・訳)、光文

- 社、『うたかたの日々』、2011、388p.
3. ポール・ヴァレリー (塚本昌則編訳)、筑摩書房、『ヴァレリー集成 II 〈夢〉の幾何学』、2011、645p.
  4. Yoshikazu NAKAJI、Classiques Garnier、『*Je m'évade ! Je m'explique.*』 *Résistance d'Une saison enfer, Etudes réunies par Yann Frémy*、2011、p.145-158.
  5. Kan Nozaki、Oxford University Press、『*Opening Bazin: Postwar Film Theory & It's Afterlife*』、2011、p.324-329.
  6. 野崎 歆、講談社、『異邦の香り ネルヴァル『東方紀行』論』、2010、438p.
  7. 塚本昌則、野崎 歆、平凡社、『〈前衛〉とは何か？ 〈後衛〉とは何か？——文学史の虚構と近代性の時間』、2010、552p.
  8. 野崎 歆、アウリオン叢書 08、白百合女子大学言語・文学研究センター編、川竹ジョジアース、福田耕介責任編集、『映画と文学』、2010、p.65-78.
  9. 中地 義和、京都大学学術出版会、『文学作品が生まれるとき 生成のフランス文学』、2010、p.169-183.
  10. マリアンヌ・シモン＝及川、勉誠出版、『日本の文字文化を探る一日仏の視点から』、2010、p.329-352.
  11. Marianne Simon-Oikawa、Calliopées、『*Traversée, Hommage à Montserrat Prudon*』、2009、p.221-230.

[産業財産権]

- 出願状況 (計 0 件)
- 取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/futsubun/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

野崎 歆 (NOZAKI KAN)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：60218310

### (2) 研究分担者

中地 義和 (NAKAJI YOSHIKAZU)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
研究者番号：50188942

塚本昌則 (TSUKAMOTO MASANORI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
研究者番号：90242081

マリアンヌ・シモン＝及川 (MARIANNE SIMON-OIKAWA)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教

授

研究者番号：77447457

### (3) 連携研究者

なし